

令和 6 年度 多摩市文化芸術振興計画有識者会議 第 4 回 要点録

開催日時・場所	令和 6 年 8 月 21 日(水) 午後 7:00～午後 9 時 永山公民館（ベルブ永山）4 階視聴覚室	
参加委員	参加委員 9 名 伊藤委員、青木委員、岩佐委員、柏井委員、高橋委員、三浦委員、春田委員、横溝委員、米屋委員	
出席職員	くらしと文化部長、教育部長、文化・生涯学習推進課長、事務局 2 名	
主な内容	次第 1	今回の検討範囲と、前回の課題の確認
	次第 2	前回の有識者会議で示された主な意見
	次第 3	団体ヒアリングについて
	次第 4	施策、骨子案、中間支援機能（案）、計画の進行管理について
議題	主な意見（●事務局、◎会長、○副会長、◇委員）	
次第 1 今回の検討範囲と、 前回の課題の確認	◎会長：議事録の修正については問題ないか。 前回の意見について確認、全委員、了承 ●事務局：今回の検討範囲について説明を行った。 ◎会長：今回は前回、議論が途中で終わった③計画全体像・骨子の検討についても少し議論ができると良い。今回は団体ヒアリングが終了し、その結果を反映して施策体系が整理されたので、事務局の説明を踏まえてご意見いただきたい。	
次第 2 前回の有識者会議で 示された主な意見	●事務局：前回の有識者会議で示された主な意見について説明を行った。 ◎会長：事務局からの前回の振り返りの説明について、補足や質問等はあるか。前回は、子どもや若い世代の活動などについて意見が出された。 ◇委員：近況報告になるが、先日、海外の若者約 20 人が多摩市にホームステイした。「ワールドキャンパス in 多摩」というイベントで、ホームステイ先の方や地域の方々、恵泉女学園大生との良い交流があった。地域の中だけでなく、一時的に滞在している人も含めて、文化交流の場があると良い。子どもたちや若者が参加できるイベントを積極的に行い、恒例行事として作っていく必要がある。 ◎会長：国際的な視点は重要だ。多摩市は様々な施設や大学等があり、交流人口も多いのではないかと。在学・在勤者も多くいると思うので、そのような方々との交流も強化していけると良い。 ◇委員：音楽やダンスは若者にとって国境がなく、SNS 等で話題になるものは言語の壁がない。そのようなジャンルを広げていけると、誰もが楽しめて、地域の活性化につながっていくのではないかと。	

	◇委員：同意である。ライブを鑑賞できる場所が増えると良い。 ◎会長：今出されたご意見は、この後の施策検討に関わってくるので、そこで詳しく議論することとし、次第３に進むこととする。
次第３ 団体ヒアリングについて	●事務局：団体ヒアリングについて説明を行った。 ◎会長：詳細については細かいので逐一説明はできないと思うが、実際にヒアリングを受けられた方を中心に感想等も含めて、何かご意見等はあるか。 ◇委員：多摩市みんなの文化芸術条例ができたときに、文化を通して人と人が有機的に繋がって交流していけるよう、その役割をパルテノン多摩や多摩市文化振興財団に担っていただきたいという希望は話した。 ◎会長：中間支援的な機能は必要だと思う。 ◇委員：若い人達が活躍できる場が必要だと思う。個別での活動は、広げる範囲に限られてしまう。人と人を繋いでいくには、コンシェルジュのような人が必要ではないか。 多摩市の学校の新任者研修に参加したが、若い先生は新しい体験に対して柔軟であると感じた。表現する力、伝える力を養うことは、人と何かを創るにあたって土台になることだと感じた。職業、年代に関係なく新しい体験ができる場を作っていけると良い。特に、校長先生も含めて学校の先生方に働きかけると、彼らが楽しいと思えば子どもたちにも伝播するので、何か仕掛けができると良いと思う。 ◇委員：皆さんが思っている課題は共通していて、場所、お金、発表の機会、イベントの周知などで、皆さんが個別に活動する中で色々な課題を抱えていると感じた。 ◇委員：パルテノン多摩にもヒアリングに来てもらえると良かった。有識者会議の各委員は文化芸術の担い手としてできることを抽出して、計画の中で示せると良い。また、中間支援機能イメージ図のネットワーク形成支援機能に、地域の中の担い手や中間支援的な活動をされている方々を入れていくことになると思うが、それらの団体の活動を行政側でどのように取りまとめているのか。ヒアリング先はどのように選定したのか。 ●事務局：ヒアリング先は庁内調査時に把握した活動もしくは市が後援する団体、文化団体連合は役員の団体、有識者会議や策定委員会でのご意見に基づく属性の団体などを中心に選定した。また、ホームページなどの情報を参考に声をかけた団体もいる。市に団体情報データが揃っていないわけではないので、ヒアリング先は悩みながら抽出した。

	◇委員：計画をつくるにあたって、少しアンテナを広げるだけでこれだけの団体がいることがわかってきた。そのような団体を見つける作業は非常に難しいと思う。ただ、それらの団体を多摩市で集約することができれば大きな第一歩になると思う。 ◎会長：中間支援は曖昧で漠然とした表現だが、アメリカのメディアでは使われてきた言葉で、元々は仲介、繋ぐことを意味する。狭義の意味では文化芸術活動を行う者と支援を行う者を繋ぐことだが、最近では文化芸術活動を行う者と社会の様々な機能である福祉や教育、地域、企業を繋ぐ、当事者同士を繋ぐなど、色々なプレイヤーを繋ぐ仲介的な機能が求められつつある。今回の計画においても、企業を含め様々な主体が中間支援機能を担っていくことが求められていて、施策の柱にもその内容が反映されていくのだと思う。 ○副会長：文化芸術基本法改正の要点として観光、まちづくり、国際交流などの各関連分野における施策との有機的な連携について説明をいただいた。芸術振興だけではなく芸術を媒介、手段として福祉やまちづくりに活用していくことが注目されている。その中で社会貢献に意欲的な若者も増えている。例えば、福祉のことを知らない芸術家が動くのではなく、間を取り持つ役割として中間支援機能が求められていると思う。行政には福祉をはじめとして様々な専門家がいるので、そのようなつなぐ役割が行政に求められている。 ◎会長：有識者会議の委員や団体ヒアリング先にはすでに中間支援的な活動をしている方もいらっしゃると思う。中間支援機能については次の次第以降で議論していくのでひとまず団体ヒアリングについてはここまでとしたい。
次第 4 施策、骨子案、中間支援機能(案)、計画の進行管理について	●事務局：施策体系について説明を行った。 ◎会長：施策について、前回は 4 つにまとまっていたが非常に漠然としているという指摘もあった。今回はアンケートの結果や前回の議論を踏まえて 7 つになった。前回に比べて、施策 A と B はまだ大まかな感じがあるものの、C と D と E は対象を絞り、多様な主体や他の分野間のつながりづくりは F にまとめ、地域アーティスト等との連携を G とし、より具体的になったと思う。施策の粒度の違いや違う視点の必要性等に対してご意見、感想等はあるか。 ◇委員：施策 E 子ども・若者の文化芸術活動の支援において、G の地域アーティストやクリエイターが入ることで、交流して人と人がつながり、子どもたちが地域でアーティストやクリエイターとして育つという連鎖ができると良いが、それがここでは見えない。どう入れると良いか。 ○副会長：太さの異なる 2 つの線がビジョンから各施策に繋がっているが、実際は全ての施策に細い線が繋がるのではないか。ビジョンの「つながり交流する」から、繋がる形で施策 E と G が結ばれるのではないか。図でまとめ

るのは難しい。施策 C と D と E は、A の重点項目あるいは内訳として特出しした関係に見えるが、実際は高齢者、障がい者、外国人等、特定の対象向けにイベントを行うのではなく、実施したイベントにおいて、自然と特定の対象も巻き込んだ状態になることが最終的な目標ではないか。例えば高齢者対象のイベントへの参加を促すと、参加しづらいと感じる方もいると思うが、退職された方に、これまでの経験を活かした芸術活動の支援を呼びかければ、協力する方は多いのではないか。どのように巻き込んでいくかという観点で、支える人たちを増やす働きかけを組み込んでいくことが、特定の対象の参加に繋がるのではないか。巻き込み方を工夫した書き方にできると良いのではないか。

◎会長：個々の施策のつながりはバラバラではなく立体的な構造であり、図示することは難しいので、今回はこのように示している。たくさんある取組の中で、多摩市として計画の中で何に注力するのかを見せることが重要だと思う。今回は、子どもと若者、障がい者、高齢者、外国人等への施策、多様な主体などを繋ぐ中間支援組織、クリエイターを使った産業社会との繋がりを示すこと等を強調している。

取組についてはイベントが前に出やすいが、制度をつくることや団体、基金をつくる、交流の会をつくるなどの取組の形も柔軟に提案いただきたい。

◇委員：現状芸術振興の色が強い。文化芸術を活用してまちづくりに繋げることに焦点を当てようとする、交流の部分の優先度がもう少し上に見えると良い。私自身も年一回大きなイベントを実施しているが、日常的な取組も必要だと思い、現在〇〇委員と企画している。廃校等を利活用して多様な人々が集まれる交流の場ができると良いと思う。

◇委員：施策 D と E が分かれることによって、子供向けの施策として弱く感じる。内容も述語が違うだけで重複している。一つの施策として芸術活動の支援にまとめても良いのではないか。中間支援のような取り組みを主として、施策 F として出していくのか、他の全体の施策に関わるものとして扱うかは議論した方が良いと思う。中間支援組織があつてそのなかで子供向けの取組み、施策 G のような地域クリエイター向けの取組みを打ち出していくという見せ方もある。

◎会長：重要だと思う。もう少し整理するか、全体的に比重がつくようにメリハリをつけられると良い。施策 B、D、E は文化芸術活動の支援に偏っている。

◇委員：施策 D と E を分けると子ども向けの取組みが薄まった印象になる。F の中間支援機関機能の強化は全体とのつながりを出してほしい。共有できるイメージ形成に大きな影響を与えるものなので、市の考えを正確に共有できるように表現は考えた方が良い。

◇委員：親しみ、楽しむ、触れるの境界が曖昧だと思う。つながりを表す線はすべてにつながるのではないか。施策 C と D はまとめられそう。

◎会長：ビジョンの中で「触れる」の意味は2つあって、乳幼児期から触れることと、誰でもいつでも日常触れることの2点でビジョンの中では分かれていた。それに沿って分けようとしたのではないか。

◇委員：その先というか、触れた結果楽しかったのか、そこまで考えると、「親しみ楽しむ」「触れる」もまとめても良いのではないか。

○副会長：骨子案のビジョン以降はまだ最終稿ではない。鑑賞、参加、各行為を分断して考えているように見えるが、地続きに捉えて良いのではないか。その辺りの言葉の使い方や見せ方などブラッシュアップしてもらいたい。

「機会がある」について、表現活動を行う主体だけにフォーカスしているような感じがするが、支援する側についても支援する機会があるといったことも踏まえてもらいたい。

◎会長：中間支援に関して言うと、一つの柱にする方法もあるし、体系の横に実現のための仕組みとして中間支援的なものがあるというように位置付ける方法もある。各ビジョンを実現するために伴走型で中間支援が下支えしていくという整理の仕方もあるのではないか。

◇委員：4つのビジョンについて、同時に進めていこうと考えているのか、順序があるものなのか。若者目線だと触れる機会があって、親しみ楽しんで、つながり交流する姿が最終的にまち全体に広がっていくという順序のように思う。その理解で見ると、この表現で正しいのか疑問に思った。同時に進めていくという意味であれば、これで良いと思う。

●事務局：ビジョンを達成するにあたり、具体的な目指すイメージを考えた時に、何を柱にするべきかと整理した結果がこの4つなので、順番は特に関係ない。

◇委員：柱を沢山つくりすぎて、理想を達成するにあたって、何を優先するべきかがはっきりしないことが多々ある。色々なことをやりたいのはわかるが、全てを同時に進めるのではなく、優先順位をつけて取り組むべきではないか。

◇委員：民間だと計画はどう達成するのかと捉える。

◇委員：実現可能なことから取り組むべきだと思っている。実現に向けて具体的にどう進めていくのか、どんどん考えていく方が良い。パルテノン多摩

もリニューアル当初の計画では色々な団体が集まって作業できる部屋をつくる話があったと聞いている。組織を先に決めてしまうのではなく、色々な主体が集まって話し合いをできる場を設けて、自然に取組が発生するように仕向けても良いのではないか。そういったところのまとめ役として中間支援機能に期待したい。

◇委員：パルテノン多摩に対する期待値は高いのだと思う。骨子案の中で財団ができること7項目を参考資料に示している。パルテノン多摩は施設が大きいので、多摩市文化振興財団も規模が大きいように見える。実際は資金や人材といったリソースはとても限られているのが現状。累積赤字があり、市からの支援がなければ行き詰ってしまう。昨年ようやく黒字転換した。貸館として収益を得ながら、立て直しを図っている。

パルテノン多摩が中間支援機能の役割をプラスアルファで果たすためには、財源が必要となる。市で財源を確保して、市の担当課職員にも関わって伴走していただきながら、新しい組織の形成によって中間支援を行う仕組みが必要だと思う。中間支援機能なのか機関なのか、担い手がこれだけいる中でつないでいく仲間がどれだけいるのが大切。

パルテノン多摩を市民の晴れの舞台として使うなら、財団は貸館料等対価をいただいて運営し、その方々に行政がどうやって補助を出していくか、そういうスキームを作っていく必要がある。

◇委員：この会議を行うにあたって、市として本当にやる気があるのか、支援をする気があるのか、それがお金を出せるのかということに繋がるのではないか。ここで集まって議論したことが実行されなければ、やっても意味がないと思う。高齢者や障がい者施策は福祉関係課に予算が多く分配されているようなので、文化についても高齢者や障がい者のためにということであれば、予算分配はよく検討してもらいたい。

◇委員：他市の文化振興計画を見ると、しっかりと財源という項目が書かれているケースもある。行政の中でどれだけ文化芸術に予算配分するか、多様な資金確保として国や都にどう申請するかなど書かれている。

市の策定委員会のメンバーには各事業を所管する部署が入っているので、各課において文化芸術分野に関連する分野に横ぐしを通し、各取り組みをどの課が主体的に行うのかを取りまとめて、文化・生涯学習推進課がイニシアチブを取って進めていくことが必要ではないか。民間に役割を求めるだけでなく、市としてどれだけ実行する決意があるか。

◎会長：計画は実現しないと意味がないので、実現のために財源や人材が必要である。計画に必要な内容はここでも議論するが、策定委員会でも予算の融通も含めて考えていかないと行政計画をつくる意味がなくなってしまう。有識者会議は、計画に盛り込むべきことを提言したり、市民の立場から見た文化のあり方を明確に出していくことが求められていると思う。計画が曖昧

だと 10 年後の計画期間完了時に成果が見えなくて、評価もできないので、この後時間があれば推進体制についても話ができると良い。

◇委員：計画の後にアクションプランも作るのか。

◎会長：自治体によっては基本計画の中に実施計画として位置付けているところもある。多摩市の場合には、実施を前提とした基本計画に位置付けているようだ。そのため、今後推進会議の中で作られていくことも想定される。

●事務局：推進会議の中で特に重点とする項目については、それが実現できているかを確認していくことになると思う。特に中間支援機能に関しては、新規につくるというよりは、今ある組織のつながりを活用して、多摩市版の中間支援の在り方を数年かけて模索して実現していくという意味で、強化という表現にしている。具体的に推進会議の中で確認していくことになると思う。

◇委員：具体策がなければ、計画の厚みがなくなる。計画をどこまで言及するかによって行動が変わるのではないか。取組も細かい部分に言及しているものもあるが、もう少し簡素化する方法もあるのではないか。

◎会長：今の話については、骨子案の 5 章に計画の実現に向けてのページがある。体制づくりについても触れているが、他の自治体では基本計画の重点施策に位置付けて予算を配分して実現性を高めている例もある。今回はそこまで書き込むかは未定だと思うが、そこまで明記が必要だと有識者会議から提言することもできる。その辺りもご意見いただきたいので、「計画の実現に向けて」の部分を事務局から説明をお願いしたい。

●事務局：「計画の実現に向けて」の説明を行った。

◎会長：この推進体制で計画が実現できるかどうか、あるいは推進体制を前提にして計画の中でより具体的な達成目標をどこまで挙げていくのかも課題だと思う。

◇委員：推進体制が中間支援の機能の強化に繋がるのか。施策体系の取組は現状多摩市で実施していることだと思うが、載せただけでは現状と変わらない。実現に向けて具体的に誰が、何を行うのか、まで書いた方がいいのではないか。

◎会長：私の経験上、推進体制をきちんと書かれた計画は少ない。行政、財団、企業、市民の方の役割を決まりきったような表現で書いているところが多い。企業や市民はいきなり役割を振られても困惑してしまう。ここの書き方は相当工夫が必要。

◇委員：財源も含めて計画ができた方が前に進みそうな気がする。市だけの問題ではないが、文化庁や他からどう助成金を集めてくるのかなどプランニングの視点だけでも書けると良いと思う。

●事務局：計画について財源は担保できるのかという議論があったが、行政計画自体に予算の担保はできない。ただ、計画の方向性に沿って所管が計画を根拠に予算取りに動くことになる。年度によって事業の優先順位があるので、他分野の事業と天秤にかけて必要のある事業に対して分配されている。計画上に表現するにしても、予算の範囲内で財源措置に努めるものとするというのが市の役割になってくる。計画に予算を紐づけることは行政においてはできないことをご理解いただきたい。

◇委員：そういう意味での実効性は民間も同じである。計画に書いたからそれが絶対に実現されるわけではないというのがここで共有できたと思う。

◇委員：今の話を踏まえると、現状の施策は細かすぎると思う。やりたいことが見えるようにした方が良い。芸術文化に触れて好きになって、自身の多様な価値観を形成していくことと、それを持っている人々が交流して、まちとか人が繋がってみんなが幸せになることの2点が重要だと思う。それを踏まえると交流の部分の議論が進んでいないので、芸術振興に力点が置かれがちだが、芸術を軸にしながらみんながどう集まって交流するかに焦点を当てて考えていけると良い。

◎会長：ビジョンの検討から関わってきた立場から見て、多摩市の特徴として子ども・若者に特化した施策が1本あると良い。

◇委員：子どもに力点を置くのは賛成。そこから始めるべきと思う。

◇委員：賛成する。文化芸術は手段であって、その先の目的を共有できるようになれば、誰もが幸せになることを中心にすれば、健幸都市という市のスローガンにも繋がって良いのではないかな。文化芸術を通して人々が繋がり、市民が健やかに過ごすまちをつくるために、機会が大きくあってその中に触れる、出会う、親しむがあると良いと思った。

○副会長：子どもの文化体験は最重要課題。芸術に触れないことには、興味を持つことはない。全て豪華な体験をする必要はないが、各団体ができることを合わせて、子どもたちに文化芸術を提供することはできるのではないかな。毎年1回は文化芸術に触れる機会があることを目標に掲げて取り組んでもらいたい。

ヒアリングやアンケートの中で、情報がないという意見が多くみられるが、実際は情報過多で選べないというのが現状。集約されていないから比較ができない。誰かが勧めたものを人間は選択しやすい。おすすめし合える環境を

形成したい。中間支援機能にはそういう役割もあると良い。

◇委員：子どものためのことをする際に、子どもに見せるものは質の高いものであることが重要。子どもたちが憧れられるのが重要で、憧れてもらえるような文化・芸術を育てることも必要なことだと思う。既存の団体を育てることと両輪で行わないと効果的ではないと思う。新しい人が入って来るきっかけにも繋がると思う。

学校は基礎を習うところでこどもが中心。建築でも、柔らかい居心地の良い場所をつくっていくと保育園のような造作になっていく。子供向けに偏らず、ある程度クリエイティブになる場所が必要。そのバランス感を議論する必要がある。

◇委員：本物を見せようと思うと、結局お金の問題に直面する。プロになるのも時間とお金がかかる。それを担うのは自身のお金。アーティストとして行政の支援を得る水準に至るにも、やはりお金が必要である。多摩市の教育委員会には予算がないと聞いているので、理想ではあるけど、現実には難しいのではないか。

◇委員：学校への派遣事業を文化庁の補助金、都の補助金を活用して実施している。文化庁の補助金は同じ学校に続けて派遣することはできない。

◇委員：本物だけを子どもたちに見せなければならないということではなく、文化芸術を提供する側の支援をするべきだと思う。

◎会長：パルテノン多摩で質の高い事業を実施しているので活用されたい。地域にも優秀な人材がたくさんいる。

本日のまとめとして、施策7つあるところを、力点を置きなおして焦点を絞っていく。3つ、4つに絞って、推進に向けて第5章で記述していく。

●事務局：追加で意見があれば8月28日までに事務局までいただきたい。

◇委員：中間支援を行うことができる人材の確保、育成が重要だと思う。子どもたちへの伝え方によって、その後の子どもたちへの関心の強さが変わる。

◎会長：中間支援機能の人材は非常に重要である。各地域のアーツカウンシル、横浜 ST スポットなどの先進事例が参考になる。実現に向けての人材育成、研究会の組織等、多摩市版の中間支援機能実現に受けて提言にまとめていく。